鉱長の恫喝で始まった

鉱山保安週間

全国安全週間のなかで、炭鉱では全国鉱山保安週間として七月一日から七日まで実施されました。恒例のように第一日目に、各部鉱長のあいさつが行われたのですが、三川鉱での野口鉱長のあいさつにはとりわけ反応が大きく、七月十一日発行の職場新聞『交流』（十八分会）はつぎのように指摘しています。

全国鉱山保安週間の初日、常一番の機械・電気の繰込時の野口鉱長のあいさつは、訓示というより恫喝（おどかし）であった。

人車や休憩所では〝鉱長のヤツ言い放題なこつ言ったなー〟とか〝頭にきたなもー〟などとだれもが言っていた。また、ある青ランプ（職制）は、〝鉱長も長ごうなかけん、言いたかしこ言わせていっちょけ〟と言っていた。

鉱長は『有明、四山に比べ、三川では機械・電気のケガが多い』という。たしかに本当だ。機械・電気が同時に六人も殺されたのも三川だけだからなー。それに三川の機電は極端な人員不足であり、不足した人員をより効果的に使おうと、一般機械と切羽機械の枠をはずし、また電気でも本線電気が切羽にきて、PC運転などしていた。

鉱長は、機電にケガ人が多いとボヤク前に、人員の補充を考えるべきだ。また、『有明、四山に比べ年齢も高く、技量も優れているのに……』というが、人員無補充の三川鉱では優れた技量をはるかにオーバーする作業量があるということだ。ケガ人は作業量に比例することを、鉱長は知らないのかなー。

『ケガする者は不適格者』というが、ケガの好きな馬鹿はいない。採炭は決められたカット数に、掘進は枠数に追いまくられ、作業員も係員も周囲に配慮する余裕などあるはずはなく、クタクタになった係員は〝俺たちには基準法はないのか〟と言っている。

さらに『不適格者は首にしたい・必要がありそうだ。

が勝手にはできず、配置転換は鉱長の権限でできる……』というが、決められた断層対策をせずに六人も殺した鉱長は適格者なのだろうか。まず自ら反省し、態度で示すよう。

話の最後にあった『優秀な一般職のみなさんに優秀な職員のみなさん、つまらぬのは鉱長……』のくだりは素直にいただくことにしよう。

三川鉱で重連が追突事故

全国鉱山保安週間第五日目の七月四日、三川鉱（野口幸光鉱長）三百五十メートル坑道十三卸連絡カーブ付近で重連電車（二十六トン）の追突事故が起こりました。

事故が起こったのは二十三時十分ごろ（二番方）で、先行していた重連大型七号車が一目抜付近で赤信号のため停車しているところへ、同じく一号車が十三卸連絡カーブの信号ナンバー42を確認するのが遅く、追突したものです。

この事故で、追突した一号車の機関車と他車二両が脱線し、脱線復旧と坑道整備などに約四時間を要し、その間同坑道の揚炭と材料輸送はストップしました。

原因は、信号と前方不確認によるものと見られています。幸い人身事故にはなりませんでしたが、五月十四日には三川鉱の二百四十メートル坑道で、六月二十一日には四山鉱五百二十メートル坑道で類似事故が起こっており、重大災害につながる危険性があるだけに十分な対策が必要です。

知事公舎疑惑で

監査請求署名スタート

福岡県知事公舎（公邸・私邸）建設にからむ疑惑を解明し、県民の税金を正しく使わせるために取り組んでいる監査請求署名活動が七月一日から県下いっせいにスタートしました。

この公舎の建設予算は、当初三億八百六十万円だったものが、公表のたびにふくれ上がって結局五億九千三百万円。さらにふくれるという声もあり、その〝超豪華〟な公私混同ぶりに批判の声は日増しに大きくなっています。

すでに県議会でも追及されていますが、当の亀井知事は「公舎批判は一部の声」と開き直りの釈明をしています。

監査請求とは、地方自治法第七十五条に定められた有権者の五十分の一の署名をもって県の監査委員に直接請求するもので、九月一日まで署名活動を行います。

新たな平和運動へ

「大牟田の空襲」第十集を発行

「ふたたびむごい戦争を起こさせない決意の証し」として、このほどその第十集が発行されました。内容は焼けあとからの出発、私の体験、平和への歩み、文芸作品などで構成されています。

一九七三年に第一集が編まれてから八年。大牟田の空襲を記録する会では、第十集発行を機会に、「悲惨な戦争体験を語りつぐ運動から、戦争をなくし平和を実現する運動への参加」をめざします。また記念行事として、八月十一日に具島兼三郎氏を招き「映画と講演の夕べ」を催します。同誌は七百円、編集部へ。

短信

ニューヨークで 反核・百万人集会

われわれは夢を抱く
恐怖から解き放された世界の夢を
平和なき正義はなく
正義なき平和はない
（コレッタ・キング夫人）

核戦争の危機が強まる中、ニューヨークで開かれた第二回国連軍縮総会をとりまく反核運動は、百万人を結集した六・一二大集会を頂点にかってない高まりを見せ、これからの運動の新たな指標を示しました。

昨年夏からのヨーロッパ反核運動の高まり、日本で三・二一広島行動、五・一三東京行動などの草の根運動が国際的に広がりを見せていますが、このニューヨークでの行動はニューヨーク市が全面協力するなど、質・量の面でまさに世紀の大集会となりました。

集会は二十七カ国の代表をはじめ、日本からは千二百二十人が参加。二千九百万人の署名を国連に提出しました。

なかま

二十六分会（港務）島 大平 さん

▼…高等小学校を出て、昭和十五年四月港務所に入社。養成工を一年半勤めたあと、汽車の罐焚として働く。

当時の汽車庫は封建制がつよい職場で苦労したが、戦後の民主化の波の中で組合が作られ、職場に新しい風が吹きこまれた。ほかの職場との仲間付き合いができるようになり、隔りがなくなったことはうれしかった。

▼…昭和三十年から今日まで二十七年間、職場や地域の役員を勤めてきた。三池闘争時は、「去るも地獄、残るも地獄」を合言葉に、一生懸命頑張った。奥さんの文枝さんも現在主婦会の会長で、日夜多忙な日々を送っている。

CO裁判闘争を支えるための羊かん販売に参加し、昭和五十一年から五十二年にかけて、長野・兵庫・四国などを回ったときの苦労談も、今ではなつかしい思い出として胸の中に――。

永い間苦楽を共にしてきた職場の仲間が、先月病気のため夭逝（ようせつ）したことが残念でならない。

今、核戦争反対の運動が、国際的に大きなうねりとなってもりあがっているが、日・米両帝国主義戦争のために、昭和二十年の大牟田空襲で商いをしていた本家と、貸家数軒を焼かれた一人として、「戦争は絶対させてはならないし、孫の時代にはいろんな面でもっとよい世の中に」と熱っぽく語る瞳が輝き、熱い血の流れを感じさせる。

▼…趣味は、写真・古典音楽・旅行など。来年の正月には再採用期間も終り、四十二年間勤めた会社をやめるが、「組織を離れても組合のことは忘れない」と。さらに、「組合員一人ひとりが助け合って、団結していくよう願っている」と、組合の今後に配慮をこめて語った。

（江口忠信・記）

島さんは、大牟田市新港社宅3区の5棟で、奥さんの文枝さんと2人暮らし。1男1女はそれぞれ家庭をもって独立し、お孫さんが一人。

「職場新聞まつり」に参加して思ったこと

五月十六日、組合事務所で「職場新聞まつり」が催された。主婦会の手料理、おでん、焼きとりで懇酒をくみ交して、遅くまで話し合いが続いた。

会場に展示された職場新聞。その中でもとくに目立ったのが、われわれの新聞『ほんしょ』であった。

一九七七年から一九八二年までの六年間の春闘特集が、ことのほか目を引いた。このようにいうと、なんだか身びいきの手前味噌のように聞こえるが、炭鉱坑外のきわだった低賃金の実態をあますことなく明らかにしているのは、『ほんしょ』以外になかったからであった。

職場新聞というのは、ザラ紙一枚というスペースであるから、書き手の意を十分に伝えないというもどかしさがある。

しかし、スペースが手狭まであったり、読みやすさが多少欠けることがあっても、たとえば春闘をとってみてもわかるが、生活保護よりも低い賃金で、三十五年も勤めても新入社員よりも低い賃金で働かされている労働者の怒りが手書きに滲み出ている。

このような職場新聞の「文字」は、炭鉱災害では泣き、結婚や出産に喜び、花見や忘年会では笑う。これほどすばらしい新聞はないのではないかと思う。

ところが、坑内や坑外での災害と隣り合わせのような保安軽視の職場の怒りや告発、悲しみと涙と笑いを伝える職場新聞が、定期発行されているのは数紙しかないという。

一紙が三百枚刷って配布したとする。この発行に二十の分会が参加したとすると六千枚。口で伝えるとしても、せいぜい十人程度。これからみても職場新聞は数千倍も多くの人に、保安無視のこと、災害のこと、合理化のこと、賃金の低いことを伝えることができる。

であるならば、職場で体験したことを一口メモで職場新聞に投稿しても、どんなに少なめにみても一瞬のうちに三百から四百人の人びとに知らせることができる。

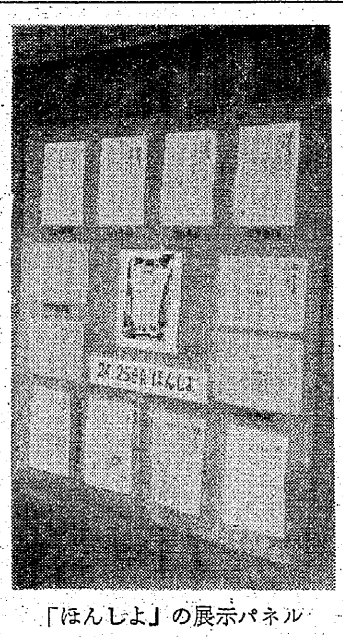
これは宣伝力だけではない。少ない人数で持つことのできる最大の「力」なのだということを知ってほしいと思うのである。さいわい『ほんしょ』は定期発行されている。

「書っきらん」といわないでほしい。だれだってハガキを書くではないか。そのハガキに書くつもりで一口メモを書けばよいのだ。気ばる必要はない。楽にしよう。

職場新聞まつりを契機に、ハガキに書くつもりで楽に書き流し、投稿しようではないか。職場での小さな出来事を。

（T）

（二十四、二十五分会職場新聞『ほんしょ』NO・56、六月二十九日発行から）



「ほんしょ」の展示パネル